

2014年（平成26年） 2月 685号

## 冬景色と神の憐れみ

アダム・クジャク

2月というと地方によって異なりますが、ポーランドでは冬休みに入ります。私の頭の中には冬の情景がいくつも浮かんできます。

小さいときは、自分の家のマンションの前で友達と雪だるまを作ったり、雪合戦をして遊んでいました。少し大きくなると家の前のグラウンドの雪を四方に寄せ、周りに雪の囲いを作り、夜中にマイナス20℃位に下がるのを利用し、その囲いの中にホースで水道の水を引き、朝にはそれが凍ってスケートリンクになるように自分たちで作りました。そこでアイススケートや、何も防具もつけないままホッケーをやっていました。

家に帰ると凍えるほど冷たくなった身体にシャワーを浴びて、家族と暖かい夕飯を食べて、皆で祈り、暖かいベッドで休むのは至福の思いでした。

ワルシャワの学校で校長をしていた時には、生徒と父兄そして先生とチェコへ合宿に行き、スキーをしたりしてスポーツの中から、子ども、親、先生との交流がとても上手くいくようになり、帰宅してからも学校と保護者の間の距離が短くなったのも良い経験でした。

このように景色というものは、きれいだった秋の落ち葉は、長い雨とともに朽ち果て、光景はどんよりとした暗い灰色になっていきました。そして12月になると雪が降り始め、段々と積もっていく雪でまたきれいな**真白な色**に町や村は覆われます。森の木々には樹氷が見られ、太陽の光でキラキラ輝くスノーダストやダイヤモンドダストはもう限りなく素晴らしい世界に私をいざないます。

同時に私たちにイエスがゆるしの恵みを授けてくださったことも思い浮かべます。イザヤ1章18節「たとえ、お前たちの罪が緋のようでも **雪のように白**くなる事が出来る。」の言葉にあるように、また聖ファウスティナの日記の中でイエスが「・・・霊魂が腐敗していく死体のようであり、人間的に見れば再生の希望が全くなく、すべてが既に失われているようであっても、神にとってそうではない。神の慈しみの奇跡は、その霊魂を完全に蘇らせる。」(1448)

「・・・最小の罪もひどく嫌う。罪で汚されている霊魂を愛することはできない。しかしその霊魂が悔い改めれば、その霊魂に対するわたしの寛大さに限りはない。わたしの慈しみはその霊魂を抱擁して、義とする。」(1728)とされています。神の慈しみと憐れみは、私たちを回心に導き、私たちの灰色の汚れた罪を認め、悔い改める心を、**真っ白な雪**のように霊魂を清くし、救って下さい

ます。来月3月5日の灰の水曜日から四旬節が始まります。イエスの復活の喜びを**真っ白な雪**のような心で迎えることができるように、赦しの秘跡をうけるよう心がけましょう。